サムライスピリッツ零　～黄泉の黎明～
弐の段　乱雲

## 弐の壱

「うおぅりゃあ！」
剛刀一閃。
気合いとともに刀は大気を裂いて唸る。鉄も和紙と大差なし――尋常ならざるその太刀筋は腰を抜かした物盗りの眼前、寸でのところで止められた。
「ま、待ってくれ！　俺の負けだ！」
その言葉を待っていれば、物盗りは血肉を散らして事切れていたであろう。
みすぼらしい身形の、如何にも堅気の商いを営んではなさそうな男は、恐る恐る目を開き、鼻面に添えられた巨大な太刀に息を呑む。今さらながら身体が震えて、恐怖というものを意識が理解する。
ざんばらの髪をした屈強そうな男は、物盗りの目を見て、にやり、と快活な笑みを浮かべた。
「俺の勝ち、だな。行きな。次からはもう少し相手を選びな」
ああ、あ、ああ――と、うまく呂律の回らないまま、物盗りは逃げ出そうとして足がもつれて転んだ。腰が抜けていることにそこでようやく気付いた。手で土を掻きながら、這ってでも逃げ出そうとする。
滑稽な姿を揶揄するように口元を緩めた。
「お前さんが何もしなけりゃ俺だって何もしねぇよ。しかし、何だな、箱根の関所も程近い天下の往来で随分と思い切ったことをするもんだ」
常人では振るうこともままならぬ剛刀を鞘に収め、ざんばらの髪の男は唸った。
箱根関所は物々しく、殆どの通行人が足止めをくらっている。理由はお上の都合以外には有り得ないので知る由もない。その影響で天下の箱根と言えども、往来に人がまるで見当たらない。もっとも、それが追剥ぎを容認する理由には成り得ないが。
首を左右に大きく振ると、ごきごきと鈍い音がした。右肩を回して唸るその様は、暴れ足りないと主張しているようだった。
どこにでもある話で、旅人を襲う物盗りと、それを返り討ちにする剣客という構図。
言葉では表現し辛い珍妙な悲鳴を残して、物盗りは街道から姿を消した。
男は名を覇王丸と名乗っている。武蔵国の旗本の生まれなので、本名は別にあるのだろう。ただ、剣の道を極めんと家族と故郷に別離を告げてより、名を捨てたのであろうか、何人もこの男の本名を知る者はいない。

見渡せば見事な桜並木が街道に彩りを添えている。
風流を愛する歌人などでないだけに、覇王丸は桜吹雪に身を置いて、素直に「綺麗だ」とそれだけを思った。
「折角の桜が血桜になっちまっちゃあ、風流もあったモンじゃねェな」
飄々（ひょうひょう）とした声が覇王丸（はおうまる）の耳に届いた。
街道から少しだけ離れたところに、周りの桜よりも明らかに樹齢の長い大きな桜が花を咲かせていた。声の主はその桜の幹に背を預けて、杯（さかずき）を煽っている。
「桜も喜んでる。誰だって血なんざ見たくねェもんな。ありがとうよ」
そう言って、傍（かたわ）らに置いてあった徳利から杯に注（つ）ぎ足し、もう一度、煽った。
覇王丸はその男の方に揚々（ようよう）と歩を進める。昼下がりの東海道、箱根の関所を一里ほど江戸に向かった街道なのに、それでも人は殆（ほとん）どいなかった。
「騒がしちまったか。悪かったな。売られたケンカを買っちまって……すまねぇ」
そう言って、男の隣に覇王丸は身を投げ出すようにして、幹に背を預けて座った。
「物騒な事件でもあったのか、箱根の関所じゃあ褌の中身まで調べられそうな勢いだったぜ。実際に徳利の中身まで調べられたけどよ……って、お前さんも関所を越えてきた口かい？　これから行こうってんなら、多少のごたごたは覚悟した方がいいぜ」
「越えてきたところだ。ま、急ぎでもねぇし、これだけ見事な桜と出逢（であ）っちまえば、ちょいと話をしていくのも良いモンだぜ……」
「なぁなぁ、それより、頼みがあるんだけよ。その、お前さんの酒、ちょいと分けてくんねぇかな？　代わりに俺のもやるからよ」
「悪いな。水だ、こりゃ。俺は下戸（げこ）なんでな、酒はどうにも……なァ？」
「……水って、お前さん、水を徳利に入れて、杯で煽ってんのかい？」
覇王丸は露骨に鼻をならしてみる。だが、男からは全く酒の匂いはしなかった。
「水筒にすりゃあいいだろうに……」
「雰囲気を楽しむんだ。酒はなくとも、心は酔えるモンだぜ？　……あ、すまねぇけど、酒やるってんなら、俺から離れたところでやってくれ。桜の香に酒の匂いが混ざっちゃ興醒めだ」
「へいへい、わかったよ」
さも面倒くさそうに返事をしつつ、覇王丸は自前の徳利から手を離し、水筒の中身を煽った。
とは言え、覇王丸はこの男の言い分はもっともだと心中では頷いていた。
風流を嗜（たしな）むということがどういうことなのか、今までもそうだがこの先も知ることはないだろうが、それでも自分の全く知らないことをこの男は悠然とやってのけている。観点の相違を目の当たりにすることは刺激的なことである。
覇王丸はあらためて男を見やった。
黄に染めた着流しで片肌脱ぎ。腰に二本、背に四本、そして腰の帯と平行に一本の巨大

すぎる刀。合計七本の刀。やや線の細い、町娘が見惚れそうな容姿とは裏腹に、着流しから露わになっている身体つきは並ではなかった。髪型も並ではなかった。巨大な髷が尖がった前髪のように自己主張し過ぎている。

目立たない部位がどこにもない。視界に入れば、注視しない方がおかしい。

しかし、男の覇王丸から見ても嫌味がない。この男はこれで自然だと思えてしまう。

「お前さん、堅気の侍か？　すげぇ髷だな……」

「アンタの前髪も大概だろうよ？」

「目に痛い色の着物だな」

「アンタ、ちゃんと洗濯してるかい？　アンタの着物も何てェのか、目に痛ェよ」

「……色々と傾いた輩にゃ関わってきたけど、お前さんは卓抜してるよ。いや、本物の歌舞伎役者の知り合いもいるんだけど、平時までこうはいかねえやな」

「くすぐってェや。いや、どうにも男に褒められるのには慣れてねェな……」

男は心底くすぐったそうに口元を緩め、杯の水を一気に煽った。

それから不意に桜を見上げて囁く。

「……アンタ、いい恋してるかい？　してねぇだろ？」

覇王丸は口に含んだ水を水筒に逆流させそうになった。少し咳き込んでから、男を睨みつける。

「風呂入ってねェだろ？　いつでも身嗜みには気を回すモンだぜ。でないと、惚れた女が逃げてからじゃあどうにもならねェぜ？」

「それを言われちゃ耳が痛いが……生憎、剣だけに生きると決めた身でね。……ああ、それとな、宿場街に着いたときにゃちゃんと湯浴みしてらぁ」

「……いや、アンタ、アレだ、郷里にひっそりと想ってくれている女を待たせてるとか、そんなんあるんじゃねェかい？　いかにも、って感じだぜ？」

覇王丸は返答に詰まった。一瞬だが、故郷にいるお静の顔が――旅に出る、もう会わないと告げた時の、悲しそうな顔が――思い浮かんだ。

「お前さん、奇天烈な浮世草紙の読み過ぎだ。いや、艶本か？　まともな物を読みな」

覇王丸の精一杯の嫌味を含んだ切り替えしに、男は肩を竦める。

しばし、互いに無言で花見に興じる。出会ったばかりの素性も知れぬ男と旧知の仲のように言葉を交わしたが、それが目的ではない。無論、なんとも居心地の良い時ではあったが、そうではない。

――こいつは強え。

一目見た瞬間、そう強者との戦いを求める覇王丸の本能がそう実感した。一瞬だが、全身が粟立つこの感覚――まだ餓鬼だった頃、柳生十兵衛と対峙したあのときの感覚に酷似している。この感覚は滅多にない。

黄に染め上げた派手な着流しに、七本の刀を帯びた出で立ち。なかなかの傾きっぷりだが、それが伊達でないことは覇王丸の勘が告げてきた。

「お前さんに頼みがあるんだけど、いいか？」
「酒ならないと言ったぜ？」
「いやいや、そうじゃなくってよ、そいつらは飾りじゃねぇだろ？　よかったら、一勝負どうだい？」
覇王丸（はおうまる）は自分の腰の剛刀――銘を河豚毒（ふぐどく）と言う――の鯉口を鳴らし、男の七本刀を顎でしゃくった。
「へッ……俺は強ぇぞ。ってトコだが、悪ぃな。今はそんなつもりはねぇ。いい女に……桜に血は吸わせたくねぇんだが……」
そこで男は覇王丸の背後に注視する。
「アンタ、客引きかい？」
「あん？」
覇王丸はその視線の先を追って、頭だけで振り返る。
江戸方面から数えて五人、侍がやってくる。旅人などではない。その身形（みなり）は明らかに主を持つ侍のそれで、各々が剣の達人であろうことも見て取れた。
侍たちは、迷いのない歩調で街道を外れ、真っ直ぐにふたりの方に歩み寄り、対峙した。
ふたりを見下ろしつつ、頭であろう侍は有無を言わさぬ強い口調で言う。
「剣の腕に自信のある御仁らとお見受けいたす。手前らとお立ち合い願おう」

## 弐の弐

それには覇王丸が頭を無造作に掻き毟（むし）りながら応じた。
「立ち合いというわりにゃ、随分と殺気だって見えるが……お前さん達に何か恨みを買うようなことでも仕出かしたのかい？　だったら謝るんだけどよ」
「いや、そうではなく、単純に御仁らの力量を知りたいだけのこと。是非」
頭であろう侍の指示で、部下の四人の各々の腰から小気味良い鞘鳴りが聞こえる。抜いた刀が陽として光る。
「御仁ら、ってことは、俺も入ってるのかい？」
「おいおい……」
「……アンタと違って、頼んでも退（ひ）いちゃあくれそうにねェな。ま、こんなに沢山の良い女達が見ているからな、カッコいいところ見せてやっても悪くはねェか」
着流しの男は鷹揚（おうよう）な態度で立ち上がり、桜の木々を見上げてそんな風に嘯（うそぶ）いた。
「花見の席にゃ喧嘩は付き物。やるなら派手にやらなきゃ損するぜ？　今日は天気もいいし、アンタらに風流ってモンを教えてやるよ」
「あちらさんはとりあえず四人ってか。お前さん、そっちの二人、任せるぜ」
「四人まとめて風流を仕込んでも構わんが？」

「俺の取り分が減っちまわぁ！」
余程、場数を踏んでいるのか。或いは、単純に喧嘩っ早いのか。
覇王丸は常人では持ち上げるのも難儀な剛刀を抜くと同時に振り被り、ろくに構えもせずに一番近くに居た侍に向けて刀を振りぬく。
「巧く避けろ――よっ！」
あまりに突然の、不意打ちに近い斬撃。しかし並外れた剣気がそれでも必殺の一撃だと、疾風を纏って刀が吼える。
咄嗟にその一撃を凌ぐべくして刀を立てたまでは及第点。受けた刀は耳鳴りがするほどの悲鳴を上げて圧し折れる。柄の握りが甘かったのか。受けた威力を殺せずに、突風に巻き込まれかの如く剣が手を払って吹き飛ぶ。指と手首があらぬ方向に曲がっていた。
驚愕と激痛に漏れる悲鳴を受けて、覇王丸は勢い付く。
「沼津の知り合いんところで打ち直してもらったばっかりなんでな！　ブン回したくってウズウズしてたんだ！　思いっ切りいかせてもらうぜ！」
次に近い場所にいた者は己の不運を呪うしかあるまい。血に餓えた獣の形相で襲い掛かる覇王丸に対し、既に恐れを成している。腰が退け、自ら打ち込むだけの気概も消沈した。触れれば必殺足りえる一方的な斬撃の嵐から、逃げ出すことも叶わない。勝敗は既に決していた。
「たまらんねェ、ありゃ……」
覇王丸の豪快すぎる闘いぶりに押される侍へ同情の視線を送る着流しの男。それは完全な余所見、致命的な隙と言えよう。無論、それをみすみす見逃すような甘さを持ち合わせた相手ではない。
気合い十分に一足飛びで襲い掛かってくる侍。着流しの男は今更気付いたようなわざとらしさで振り向きつつ、片手で腰帯に固定してある巨大な七本目の刀の鞘を持ち上げ、迫り来る侍の鳩尾に突き立てる。背骨まで突き抜ける衝撃に呼吸が止まる刹那、さらに鞘の先を上に振り上げて顎を強打する。呼吸困難と顎を割られた激痛に、訳が判らなくなった侍の脛を払う。
「がっついちゃあいけねェな。嫌われるぜ？」
「やるねぇ！　俺も負けられねえや！」
刀を抜くことなく、鮮やかな技で相手を片付ける――風流を仕込む手付きに覇王丸は触発される。既に腰が伸びつつある相手の刀は、覇王丸の渾身の一撃に耐えうるだけの強度はなかった。もっとも、刀だけでなく、その持ち手の心が既に屈してはいたが。武器を弾き飛ばすと、素早い踏み込みから刀の柄で鳩尾を打ち、前のめりになったところで延髄を同じように強打して昏倒させる。
並みの実力では覇王丸の相手は務まらない。
「前座はこれで終わりかい？　いい具合に身体も温まってきたぜ。それじゃ、お望み通り立ち合ってやろうじゃねえか！」

次の獲物を狙う覇王丸（はおうまる）の眼光に、しかし指揮を執っていた侍は怯むことなく剣を抜いて応戦する。
「あんなモン振り回されたんじゃあ怖くてかなわんねェ。下手な怪談より震えちまう」
その涼やかな闘いぶりは、覇王丸とは正反対の華に舞う蝶の如し。残った侍の刀を紙一重で見切り、躱（かわ）しては確実に蹴りや拳を打ち込んで、刀は使わずに圧倒する。起死回生を狙った渾身の一振りも、手負いの状態では意味を成さない。ただの大振りとなれば、着流しの男は軽やかに身を躱し、七本目の刀の巨大な鞘で脛（すね）を強かに打ち払う。
「男は引き際が肝心だ。無理だと思ったら出直さなきゃァな」
立ち上がってこないことを確信して、覇王丸の方へと注視した。
勝負は見えていた。その過程を見るだけ。
実力はあったろう、しかし、相手が悪かったと言い訳をするのが関の山。さもなくば、己の未熟さを呪うのみ。持ちうる限りの全てを込めた斬撃は、真正面から覇王丸の一撃の前に刀もろとも文字通りに粉砕された。勢いに耐え切れず、仰向けに倒れた侍頭に覇王丸は詰め寄り、止（とど）めとなる追い討ちを振り下ろすが――
「その辺にしときな。これ以上は楽しい喧嘩じゃなくなっちまう」
倒れた侍頭と覇王丸の刀の間に、着流しの男がその巨大な鞘を割り込ませていた。
「……おっと、うっかり勢い余っちまったな。お前さんの流儀に合わせて、色々と気を使ったんだけどな」
もともと寸止めするぐらいの気持ちはあったが、実際は振り切っていた可能性も否定できない。覇王丸は苦笑して、愛刀を収める。
呆気ないほどに勝負はあっさりと着いた。
「何のつもりか知らんが、興味本位で立ち合おうなんざ思わんこったな！」
怒気を含んだ覇王丸の一喝に、なお刃向かおうと思う者はこの場に居合わせまい。
五人の侍は来たときとは裏腹の、見る影もない様子でこの場を去った。

## 弐の参

「なぁ、やっぱり一本やらねぇか？　本気になったお前さんの実力が知りてえんだ」
やはり消化不良なのか。立ち合いを挑んできた侍たちの姿が見えなくなると、覇王丸は着流しの男に再度挑む。我慢を知らぬ童子の如き屈託のなさである。
刀を使わずにあっさりと相手をいなしたその実力に、とにかく興味を惹かれるのだ。
「よしな。無理強いは厳禁だぜ？　そもそも、アンタ、自分で言ったろ？　興味本位で立ち合おうなんざ思わねェことだ」
「――違ぇねぇや」
自分で口にした言である。

あまりに真っ当過ぎる切り返しに、覇王丸（はおうまる）は鼻先で笑って諦めるしかない。
「お前さん、これからどうする？　俺は江戸に行くんだが、今から急げば、小田原を越えてなんとか大磯まで行けるんじゃねぇかと思ってんだけどよ」
「さて……急ぎの旅でもねェからなァ……。江戸まで行くか、途中で帰るか……。その時の風に訊いて決める旅だ。今日のところは、小田原より先に行くつもりはない」
「そうか、じゃあ、ここでお別れだな」
着流しの男は喧嘩があったことすら微塵も感じさせない様子で、飄々（ひょうひょう）と応じた。
刀を存分に振り回した分だけ、覇王丸は身体が熱を持っている。何となく、その差が気に入らなかった。だからと言って、それが何の意味も持たないことは心得ている。
桜の根元に投げ出してあった荷物を手早く纏（まと）めて背に担ぐ。覇王丸の旅支度はそれで出来上がり。歩ける限り、日本全国何処（どこ）までも行ける。
そんな旅慣れた覇王丸の様子に興味を惹かれたのか――
「なァ、アンタ、そんなに急いでどうするんだい？　江戸に急ぎの用でもあるのかい？」
着流しの男はつい、覇王丸にそんな質問を投げかけた。
「ん？　目的地は日輪國（ひのわのくに）ってとこだ。何だかよくわからねぇけど、方々から強ぇヤツらが集まってるって聞いてな。腕試しにでもなりゃあなって思ってよ。そもそも腕っ節の強ぇ奴らと刀を交えたくて始めた旅だ。一箇所にそんな奴らが集まってくれるなんて願ったり叶ったりよ。だろ？」
「……ほぅ、日輪國ねェ。しかし、日輪なら逆だぜ？　東海道上ってどうすんだい？」
「いや、そいつぁな、その噂を聞いたのが沼津なんだ。預けた刀が打ち終わるまで町に何日か居たときに聞いてな、すぐにでも向かおうと思ったが、来た道そのまま戻るってのも癪じゃねえか。で、決めた通りに江戸まで行ってから、中山道で日輪國を目指すことにしたって訳よ」
「成る程な。江戸からなら中山道の方が早い。しかし、アンタ、江戸で何するつもりだったんだい？　その様子だと、道場破りでもやりかねんな」
「細けぇこと詮索すんなよ。野暮（やぼ）だぜ」
快活に笑うと覇王丸は男に背を向けて街道を進んでいく。
首だけで振り返って、手を振って別れを告げる。
「そんじゃ、俺は先に行くぜ。よかったら後から来いよ。やることねえんだったら、きっと面白えからよ」
そして十歩も進まないうちに、はたと振り返る。
未練がある。
やはり、この男と喧嘩したいと、心が疼く。
「今度会ったときはひとつ頼むぜ！　お前さんとの喧嘩は楽しそうだ！」
「気が向いたらな」
「約束したぜ！　じゃあな！」

一方的な約束を押し付けて、今度こそ覇王丸は小田原のその先、大磯を目指して東海道を急ぐ。

少しだけ気だるそうに、男は桜の木の根元に再び身を横たえる。

桜を見上げて、先程から疑問に思っていたことを口にする。

「……俺、野暮だったのか？」

風に舞う桜の花びらが、頬を撫でてくれた。

## 弐の四

江戸城　中奥御座の間。

「うむ、実に大儀じゃったな、十兵衛」

上段の間から労いの言葉を受け、下段の間に座し、報告を終えた柳生十兵衛は平伏する。

代々公儀隠密及び将軍家剣術指南役を務めし柳生新陰流の当代である柳生十兵衛。柳生新陰流に二刀使いの概念を取り入れた独自の技にて更なる進化を経て、今なおその卓越した剣技は極まるところを知らず。十兵衛の目指す頂きは果たして如何なる境地か。

上段の間に座し、徳川十代将軍家治は十兵衛の報告を鷹揚に聞いていた。形通りに労うと、中断していた趣味の将棋をひとり嗜む。

初春より十兵衛は四国一円視察の任に当たっていた。江戸城下とは比較にならぬ辛酸な浮世の姿を、ありのままに報告する。そして思うことあらば、上申するより他にない。それが可能な立場になるならなおさらであろう。

「家治様、飢饉の影響は未だに色濃いものにございます。各藩が実施している倹約令も如何ほどの効果が望めるやもわかりませぬ。畏れながら申し上げますが、形ばかりの倹約令ではなく、官職はもとより江戸市井まで徹底した倹約令を――」

「田沼に任せておる。うまくやっておろう？」

将棋の盤面から視線を逸らせることもなく、そんなふうに十兵衛の言を遮り一蹴する。

十兵衛とて長く家治に仕えている。家治の政治に関する関心の低さは――何故そうなったのかという理由も含め、承知している。だが、肝心の田沼意次に一任した結果が現状であり、それがこの先大成するであろうか。

飢饉対策は後手ばかり――家治に伝わらぬ悔しさを、十兵衛は心中で押し殺す。

ぱちり、ぱちり、と一定の間隔で駒を指す音がはたと止む。

「十兵衛、最近、どうにも騒がしくてなぁ……」

庭先の桜を見つめ、珍しく家治から十兵衛に話し掛けてくる。意外な出来事に、何事かと十兵衛は家治の年齢以上に老け込んだ顔を注視する。

「日輪の兇國我旺が余に対してよからぬ謀を企んでおるとかおらぬとか……」

「御老中は何と？」

「根も葉もない噂じゃと。しかし、気になっておってな」
当てにはなるまい、と問うておきながら思う。
何やら思案している家治の次の言を十兵衛は待つ。
「――十兵衛、四国から戻ったばかりじゃが、兇國我旺の件、そちの方でも調べよ。半蔵が奥州におったな。呼び戻し、そちの思うままに伊賀衆を任に当たらせよ」
「伊賀衆を思うままに……。家治様は、この件に何か確証でもございますか？」
「いや。ただな、根も葉もない噂であれ、叛意など良いものではない。真偽を早々に検分しておく必要があろう。その辺りに関しては、田沼よりもそちの方が適任じゃし、伊賀衆の助力があれば動き易しというものじゃろう？」
四国より戻るにあたって、身をおいた東海道の宿場町では確かに十兵衛もその風聞を聞いている。真偽の程は兎も角、不穏な噂が流れていることはその耳で確かめてある。
では、もうひとつの風聞は如何なる意味を持つのか。
忠國の魂を抱きし、真のますらおを日輪が欲している。
太平の世にあって、兇國我旺が欲しているものとは如何なるものか。
「心得ました。早急に日輪に向かいましょうや」
疑問はさておき、命とあらば動くのみ。
叛意の風聞の悪性など言うに及ばぬこと。急いで損はない。
深く平伏し、十兵衛は立ち上がる。そこを家治が制した。
「そこまで急がずともよかろう、十兵衛。今日ぐらいはゆるりと一指し余の相手をせい」
「されど、家治様のお相手が務まるほどではございませぬが……」
「たまには戯れもよかろう」
盤上の駒を崩し、並べ直しながら家治が微笑を浮かべる。春の香気のせいか、家治は塞ぎ込んだ様子もない。今日は機嫌が良いらしい。
家治の将棋好きは有名な話で、好きなだけでなく腕前も大層なものである。
十兵衛が相手を務めるのは、言葉通りの戯れでしかない。
一礼して滅多に上がることのない上段の間に身を置き、盤面を挟んで家治と向き合う。
しばし将棋に興じていると家治は人払いをして、それからぽつりと漏らす。
「……慶寅は、最近、どうじゃ？」
「いつもどおり駿府におられるのではございませぬか？」
「うむ……その通りじゃがな……」
家治が人払いをして十兵衛と将棋を指すときは、決まって慶寅のことを気にしてるということを十兵衛はよく心得ていた。
徳川慶寅。家治の最後の実子。本来なら次代将軍となるべき人物。
家治は長男家基を失って以来、政治に無関心となり、継嗣として一ツ橋家より家斎を迎え入れた。政治からあえて遠ざけた、残った息子、慶寅とは滅多に顔を合わせることはない。慶寅を次代将軍とすれば、鷹狩りの帰路で変死を遂げた家基の二の舞となりかねない。

慶寅自身が将軍になる気はないと公言し、江戸には近寄らず、駿府で放蕩に徹しているのはそんな父・家治を気遣ってのことであろうか。
十兵衛は慶寅のことを良く知っている。剣術指南役として幼き頃より剣の道を説いてきた。例え放蕩者と蔑まれようと、何をやらせても水準よりも高い評価を得てしまう慶寅の素質が稀有であることは間違いない。天稟の才とは現にあるものだと、努力の人である十兵衛からすれば感嘆に値する。
それだけに、家治が表面上は家斎を次代将軍としていても、心中では慶寅に継いで貰いたいと欲している気持ちが理解できる。
市井は市井で、江戸城は江戸城で、世知辛いものである。
「慶寅は、将棋は巧いのか？」
「……独楽回しは得意だったかと」
「慶寅とこうして将棋を指したいのう」
それ以上は何も言わず、盤上で駒を指す音だけが、ぱちり、ぱちり、と悲しげに鳴っていた。

## 弐の五

飛鳥山もいよいよ桜の盛りが近付こうとしている。
まだまだ満開とはいかないが、それでも花見の季節である。
夜通し花見に興じて、疲れ果てて眠る。お祭り好きが累々と飛鳥山に転がっている。目が覚めれば再び酒を飲み、また疲れ果てるまで踊り、騒ぐことであろう。
慶寅は瞼を抜けて目を焼く陽の眩しさに無理矢理意識を呼び戻される。夜桜見物に飛鳥山に来て、そのまま周りと一緒になって馬鹿騒ぎをした記憶がある。いつしか寝入ってしまったようで、両脇に女郎を抱いたままである。
寝起きに桜の香と女の香。最高の目覚めと言えよう。茣蓙の上で背も腰も痛いうえ、寝不足の感はあるが、それを差し引いても気分は良い。
両脇で寝返りをうつ女郎の仕草の愛らしさに口元が緩む。
周囲は同じように寝入っているものばかり。浮世から一時でも逃れようとしている、哀れさが見え隠れする宴だった。
慶寅は空と桜を見上げながら、大欠伸をする。
「慶寅様、お久しゅうございますな」
そう言って慶寅を見下ろす十兵衛は、酷く呆れた顔をしていた。
「半蔵の屋敷に立ち寄りましたら、楓殿より慶寅様が飛鳥山で儂をお待ちしていると」
欠伸を噛み殺し、起こさぬように女郎の肩から両手をそっと抜き、慶寅はまだ完全に目覚めていない身体でようようと立ち上がる。

「お、十兵衛、早かったな。いつ、江戸に戻ってきたんだ？」
「昨日にございます」
黄に染め抜かれた着流しに付いた土埃を払い、髪に残った桜吹雪を振り落とす。背と腰に背負った七本刀が鍔鳴りした。
「……知らぬ女子をはべらせていたご様子ですが、駿府の恋人達が知れば何と申しますかな」
「おいおい……勘弁してくれよ？」
駿府には慶寅（よしとら）の六人の恋人がいるが、江戸に来ていることは秘密にしている。
半蔵の屋敷に寄ったときに、久々に楓（かえで）――半蔵の妻であり、勿論、忍（しのび）である――と会った。十兵衛とも慶寅とも近しく、慶寅と顔を合わせるなり開口一番「慶寅様、駿府の恋人たちから、そろそろひとりだけ選んで差し上げましたか？」そう言って茶目っ気をあてられたものである。この手の話題には必ず慶寅は、六人全員を平等に愛している、と断言していた。
「江戸城には参られておらぬご様子ですな」
「そう言うなって。半蔵の屋敷に寄るのが精一杯ってなモンだぜ？」
「遊び歩かず、そのまま半蔵の屋敷に滞在していただけると、探す方も楽なのですがな」
江戸城に立ち寄らない理由は言うまでもないが、しかし、家治（いえはる）に壮健であるところを見せておいても悪くはない――そんなことを十兵衛は思う。昨日の家治の心寂しき姿に影響されたのは事実である。
半蔵の屋敷は江戸城に近く、慶寅が江戸で頼りにしている場所でもある。慶寅は十兵衛が江戸に戻ると必ず半蔵の屋敷に立ち寄るだろうと見越して言伝を頼んでいた。慶寅が江戸に着いてから五日ほど経つが、毎日、今日はどの辺りにいると伝言を頼んでから遊びに行く。
ちなみに、一日前は不忍池（しのばずのいけ）、二日前は亀戸（かめいど）天満宮、三日前は百花園、四日前は浅草寺である。不忍池から半蔵の屋敷まで戻ると、夜桜を見たくなって飛鳥山まで足を運び、今に至る。
見事な放蕩ぶりにも慣れてきたつもりではあるし、それが擬態であることも承知している。だが時々それが本性のような気がしてくることもあり、十兵衛は戸惑う。それが呆れた表情として出てしまう。
「さて、慶寅様、単刀直入に伺いますが、この十兵衛に此度（こたび）は如何（いか）なるご用件でありましょうか？」
「ああ、そうだったな……」
周囲には人が多い。意識がある者が数少ないとはいえ。
「腹減ってるだろ？　場所を変えようか」
向かった先は、半蔵の屋敷から遠く離れていない伊賀町。徳川家康時代に江戸に移り住

んだ伊賀忍者の多く住まう場所である。
慶寅(よしとら)が先導して入った料理茶屋は、勿論、市井(しせい)に紛れた伊賀者が切り盛りしている店で、慶寅のことも十兵衛のことも十分に承知している。
密談には適した場所と言えよう。
誰もいない広い座敷に通され、慶寅と十兵衛は向かい合って座る。
「十兵衛、酒はいいのか？」
「慶寅様が呑(の)みませぬのに、儂が呑むわけにはいきますまい。そもそも、酒に溺れるような時刻でもありますまい」
十兵衛も酒は嫌いではないが、昼前から煽るものとは思えない。何より、慶寅が人払いをしてまでの話があると言っているにも関わらず、酒など煽れようものか。
運ばれてきた茶で口を濡らすと、少しだけ慶寅は間をおいた。
「飯が出来るまで、まだ時間がかかりそうだな」
「その様ですな。では、慶寅様、改めて伺いましょう。わざわざ江戸まで花見に参った訳ではありますまい」
「……そうだな。花見もしてるんだが、アンタに隠し事なんざできそうにねェしな」
慶寅は苦笑して、話を始める。
「最近、ちらほら耳にする噂の真偽を知りたくて、な」
「やはり、その件でしたか……」
十兵衛は小さく嘆息する。
慶寅と兇國日輪守我旺(きょうごくひのわのかみがおう)の浅からぬ因縁については、十兵衛も承知している。江戸を訪れることを極力避けている慶寅が自らの意思で江戸に来たのは、情報が日本で一番集まっている場所だからという理由以外にはない。
「真偽の程は、江戸城においてもまだ掴めておりませぬ」
「アンタの見立てではどうなんだい？」
「四国より戻る際、そのような風聞、確かに耳にしましたが……確証がある訳ではございませぬ」
「確証……ねェ……」
天井を見上げて呟く慶寅の胸の内に、先日の出来事が去来する。
「慶寅様、この十兵衛が日輪まで赴き、真偽を問う任に当たっております。遠からぬ内に風聞の真偽、明らかに致しますので、何卒、神妙にお待ちくだされ」
「昨日、四国から戻ってきたばかりじゃねェのか？」
「左様にございます。されど、風聞が真であらば徳川転覆の危機ともなりかねますまい。準備が整い次第、江戸を立ちまする」
「具体的には何日後だ？」
「明確には判りませぬが、おそらくは三日ないし五日の内に出立いたします」
「そうか……」

五日と訊いて、慶寅（よしとら）の表情が翳（かげ）る。
「ご心配召されますな。この十兵衛、東海道を三往復したところで何らかの影響があるような鍛え方は致しておりませぬ」
「あー、そうじゃねェんだ。アンタがとんでもなく強ェことぐらい百も承知してるぜ？」
そうじゃなくってな……、と慶寅は言い辛そうに呟いてから、次の言葉を続ける。
「久しぶりに、稽古つけてもらいたかったんだけどな……流石に遠慮しとこうか」
「む、そういうことでしたら、慶寅様の剣術指南役としては是が非でもご希望に応えねばなりますまい」
「だから、やめとくって。大事の前にアンタの手を煩（わずら）わすような真似したくねェよ」
「慶寅様の相手が務まる者は駿府にはおりませぬか？」
「ああ、いねぇってワケじゃねェんだ。……ただ、十兵衛だけなんだよ」
「と、申されますと？」
「本気で俺とやりあってくれるのは十兵衛だけなんだよ」
慶寅のその言葉に、十兵衛は何ともやりきれない思いがした。仮にも家治（いえはる）の実子が相手では、萎縮して手心を加えてしまうのも仕方のないことと言えよう。もっとも、仮に手心なしで慶寅と手合わせして無事との保証もない。
慶寅の心中に巣食う孤独が如何程（いかほど）のものか、窺い知ることは誰にも適わない。
会話が途切れる頃合を見計らったのか、一の膳、二の膳と続けて運ばれてくる。
「おっと、来たか。十兵衛、どうだ？　葉生姜に生蕨、どっちも初物だ。縁起物だぜ？」
「これは有り難いですな」
「流石に初鰹の時期じゃねェのが残念だが……。十兵衛、吉報を期待してるぜ」
箸を椀に付けながら、慶寅は粗野な素振りでそう口にした。
「お任せくだされ」
持ち得る限りの力を尽くすことを十兵衛は胸に誓った。

## 弐の六

食事が済むと、出立の用意にと十兵衛は去った。用事があるときは半蔵の屋敷まで赴けばなんとかなるだろう。
さておき、慶寅は物思いに耽る。
広い座敷にひとり胡座をかいて、天井を仰いだ。
「叛意の確証、ねェ……」
――数日前。
ざんばらの髪の、屈強な男と肩を並べて、派手な喧嘩をやらかした日のこと。

再会を約束して、ざんばらの髪の男とは別れた。
慶寅(よしとら)はそれから少しだけ街道を進み、小田原の宿場町まで残り僅かとなったところで、街道沿いの桜の木の根元に腰を下ろした。そろそろ沈み切ろうという夕日を眺めながら、徳利の中の水を手酌で呑む。
「出てきな。俺に何か話があるんじゃねェのかい？」
日が暮れる前に小田原に着こうと街道で先を急ぐ旅人に追い抜かされ、慶寅は完全にひとりきりだった。慶寅は誰もいないにも関わらず、そう口にした。
ややあって、慶寅から距離をとった桜の木の影から、ひとりの侍が姿を見せた。後を着いて来ているのは判っていた。ざんばらの髪の男は気付いていなかったようだが、遠くに退いたと見せかけて近くに潜んでいたことを慶寅はすぐに気付いていた。ただ、害意の有無は実際に問わねば判断のつけようがない。
どう転ぶかは判らないが、宿場町に厄介事を持ち込むのは避けるべきだと思った。
侍は、丁寧な足取りで慶寅に近付くと膝を着き、恭(うやうや)しく一礼した。
喧嘩相手の侍の頭だった。顔面は蒼白で、唇は震え、口元から血が滲んでいる。
「先程の無礼、どうか、お赦(ゆる)しくだされ。御身(おんみ)らの実力を測るには、あのような手段にしか思いつかず、無作法に走らざるを得ぬ結果となり、御身らには申し開きのできぬ真似を致してしまった……」
「いいさ、別に。たまにゃ喧嘩もやらねェとな」
「御身は拙者の見立てに違わぬ、剛の者……」
「直接アンタとはやりあっちゃいねェけど、まァ……それより、アンタ、主は誰だ？　主持ちの身にいきなり喧嘩売られる憶えも……無いとは言えねェか。どちらにせよ、主持ちが天下の往来で刀抜くなんざ、尋常の事とは言えねェなァ」
「我が主は、日本全土より、真のますらおを求めておられる。御身の如きますらおが我が主に仕えるなれば、ますらおを求め、各地を奔走せし拙者も本懐である」
そこで男は咳き込む。口に添えた手から鮮血が零れる。
「……此処(ここ)で散るとも悔い無し」
苦痛に耐え、脂汗(あぶらあせ)に全身を濡らして男は慶寅の目を見据える。
己の意思を突き通さんとする頑(かたく)なさが痛々しいほどに伝わる。
見れば、男の着物の腹から下がどす黒く染まっていた。慶寅もざんばら髪の男も、致命傷となる深い傷は負わせていない。ならば、男は自らの腹を切ったのだろう。その上で慶寅の前に現れるのは死を以(も)ってのことであり、名も知らぬ侍の言は命を賭しての嘆願であろうことが容易に推測できた。
「俺は誰かに仕えるつもりなんかねェけど……会ってみるぐらいだったら、まァ、いいかもな」
「そうか、かたじけない……」
男は苦痛を押し殺し、満足そうな笑みを浮かべた。

「案内できぬのが心残りではあるが、日輪國(ひのわのくに)に向かわれよ。御身(おんみ)ほどのますらおであれば、おのずと我旺(がおう)様に……」
そこで男は言葉に詰まった。
両膝を着いたまま前のめりに倒れたその様は、慶寅(よしとら)にひれ伏して嘆願しているようであり、慶寅は命を賭した男の言葉が終わる前にその場を離れるような野暮(やぼ)はしたくなかったが――
「……天下の往来で、主持ちがどこの馬の骨とも知れねェ輩に土下座なんてするモンじゃねェぜ？　ちょいと待ってな、すぐに医者を呼んでくるからよ」
そう言って慶寅は小田原の宿場街に急いだ。
ただ、無駄だとは判っていた。

思い出せば身震いしそうだった。
かたじけない、と言ったときの、自らの死さえも凌駕した笑顔の、なんと美しかったことか――。
最後まで名乗らなかった男だが、今わの際に口にした主の名は心得ている。
兇國日輪守我旺(きょうこくひのわのかみがおう)。
「我旺、アンタ、やっぱりすげェな。部下にあんな見事な死に顔、なかなかさせられるモンじゃねェよな……」

## 弐の七

――五日後、半蔵の屋敷前。
「慶寅様、見送りに来て頂けるとは恐悦至極に存じます」
日輪國に向けて旅立つ直前の十兵衛のもとを、慶寅が訪れた。
早朝の陽も昇り切らぬ薄闇の中、春先とはいえ早朝はまだ肌寒い。
「今日出発するって連絡もらったんだぜ、来るに決まってるだろ？」
「黙って行く訳にもいきますまい」
「当然だ。折角江戸にいるんだからな、見送りぐらいさせろって」
慶寅が屈託なく笑って十兵衛の肩を叩く。十兵衛もつられて笑う。が、慶寅の手から伝わる期待の念が重く感じられて、十兵衛は改めて任の重さを肌で知った。
屋敷の門の前にはふたりだけ。慶寅は周囲の気配を探ってみるが半蔵はいない。
「日輪にはひとりで行くのか？」
「いえ、奥州より半蔵を呼び戻し、伊賀衆の助力を受けるつもりにございます」
「そうか、半蔵を見ないと思ったら奥州にいるのか」

「奥州にて飢饉の被害状況検分の任に就いております。伊賀衆の者に、半蔵への書を届けてもらうよう手配した故、儂はこれより中山道を行き、碓氷峠を越えた坂本、軽井沢あたりで半蔵と合流致す予定。そこで半蔵と日輪調査の方針を相談し、行動に移りましょう」
「半蔵もいるなら余計な世話かもしれんが、気を付けてくれよ、十兵衛」
普段の慶寅からは滅多に感じられない不安混じりの表情に、十兵衛は鷹揚に笑って応える。
「心配無用にございますぞ。風聞など当てにならぬもの。早々に終わらせて、慶寅様の稽古を存分につけて進ぜましょう」
「そうだな。期待してるぜ？」
「それよりも――」
十兵衛は咳払いして、真摯な目で慶寅を見据える。
「今回の件につきましては思うこと多々おありであることは重々承知しておりますが、どうかこのまま江戸城か、あるいは駿府にて御自重くだされ」
「何だ、信用ねェんだな、俺は」
「駿府におられる恋人達を心配させるような真似はお控えくだされ、と申し上げておるのです」
「心配すんなって。浮気以外で心配なんざかけやしねェよ」
「何の自慢にもなりませぬが……とにかく、確証が取れ次第、連絡を致します故――」
「わかった、大丈夫だ。俺を信じろ、十兵衛。心置きなく任に当たってくれ」
何の根拠もない自信をひけらかすように慶寅は胸を張った。
そこはかとない不安が十兵衛の胸によぎるが、慶寅が大人しくしている保証がないのと同様に、叛意の風聞が真であるという確証もない。急ぎ、それを証明すれば万事解決。それから一週間は床から起き上がるのが困難な程に稽古をつけて――それで少なくとも慶寅の周囲は太平と言えよう。
小さくまとめた振り分け荷を担ぎ、編み笠を目深にかぶる。
身分に一切とらわれない気さくな慶寅と雑談するのは、つい時間を忘れてしまう。
此度の任は急務であることを忘るべからず――。
「では、行って参りますぞ。慶寅様、吉報をお待ちくだされ」
「ああ、待ってるぜ、十兵衛」
隠密の任にありながら、主に送り出されるとは何と幸せなことか。
不意に感傷的になってしまう心を自制する。
澱みなく力あふれる歩調で十兵衛は慶寅に背を向けた。
――公儀隠密・柳生十兵衛、いざ、日輪へ往かん。

十兵衛は江戸より始まる中山道を往く。

足早に街道を進み、最初の宿場町・板橋を越え、次の蕨へと向かう。江戸に程近いこのあたりでは人も多い。その中、十兵衛は何者かが執拗に背に張り付いているのを感じていた。いつ頃からかと言えば、板橋に着いた頃からであった。

味方、とは思えない。

今の十兵衛の味方として挙げられるのは伊賀衆のみである。その歩法は明らかに忍のそれとは違う。休息をとるふりをして横目に見れば、太刀と脇差を腰に帯びている。

丁度、次の宿場町・蕨までの中間あたり。街道沿いに民家もなく人通りもなくなると、十兵衛は頃合を見計らい、街道から外れて雑木林に飛び込む。不意の出来事であったが、後をつけていた男も反応し、咄嗟に雑木林に飛び込む。

しかし、一瞬の対応の遅れが致命的であった。後の先、というわけにはいかない。既に十兵衛の姿は雑木林の暗がりに紛れ、気配も断たれた。

男は編み笠を脱いで視界を確保しようと、編み笠に手をかけたところで――

「さて、儂に果たして何用か、お答え願おうか……」

背後、それも明らかに一刀の間合いから聞こえる静かな声と、押し付けられる重厚な殺気に男は動きが止まる――否、動けなくなった。

「何用かと問われても、拙者、用を足しに街道から逸れたまでのこと故、お答えできることなど何もござらぬ……」

「おぬし、よき主に恵まれたようじゃな。尾行の技法も知らず、虚言の並べ方も知らぬ。侍としてはそれでよかろうが、隠密としては足りぬわ」

「……さぞ名のある御仁とお見受け致すが、名をお聞かせ願えませぬか？」

「生憎と名乗る名は持ち合わせておらぬ。さて、お答え願おうか。儂に何用か？」

そこで会話は途切れた。

一瞬の静寂の後、男は太刀に手をかけ、振り向き様に下段から逆袈裟に振り上げる。背後の十兵衛の位置は聴こえてくる声だけで予想をつけて――。

だが、その太刀は鞘から抜き終わった刹那、十兵衛の左手の脇差で止められていた。刀がせめぎ合う音が太刀を持つ右手に予想しなかった痺れを伝え、男は咄嗟に太刀を握り直そうとするが、何故か右手の痺れは消えていた。

どさり、と鈍い音が足元から聞こえた。

何故か。

そこに見慣れたはずの太刀と、それを握ったままの右腕が落ちていた。白い骨と赤い肉が、初めて目の当たりにする己の中身が、妙に美しく思えるのと、かつてない激痛に身が苛まれるのは同時であった。

――右腕が無い。馬鹿な、何故、何故だ？

地に投げ出された右腕と、かつて右腕があった個所を忙しなく交互に見やる。

「このような雑木に囲まれておれば、太刀筋は上下に限られよう。受けることなど、至極簡単なこと……」

十兵衛は前に踏み出し、右足で地に落ちた男の太刀を拾われぬように踏みつける。もがく男を無慈悲な目で見据え、まず脇差、次に、いつ抜いたかも判らぬ太刀、と順に鞘に収める。

男は悟った。自分が追っていた侍は、二刀使いなのだ、と。脇差で受けた刹那に、もう片方の太刀が自分の右腕を斬り捨てたのだ、と。

「お、お見事な、お手前に、ござる……」

肘から先を失った右腕の傷口を抑える左手の隙間から、夥しい血が流れ落ちる。

耐えがたい苦痛に、しかし男は悲鳴は上げない。その胆力には十兵衛も恐れ入る。

「我が主は、日本全土より、真のますらおを求めておられる……。無理を承知でお伺い致すが、我が主に仕えるつもりはござらぬか？」

「お断りいたそう。されど、おぬしの主には儂からお訪ねした方がよさそうじゃな。おぬし、何処の者か？」

「お答え、致し……かねる……」

苦渋の形相で男は立ち上がり、残った左手で脇差を抜く。右腕から流れる血は勢いを増し、すでに致死量とも思えた。

「勝てぬ事など百も承知。されど、この有様では生きる事も叶わず、万にひとつ、生き残れたところで、我が主に会わせる顔もなし。武士として、散るならば、死合の中で――いざ！」

死に場所を求める裂帛の気合いに、十兵衛は頷き、目深に被っていた編み笠を脱ぎ捨てる。

刀の鍔を眼帯とした、隻眼の二刀使い。

剣の世界に生きて、知らぬはずがあろうか。

ああ――と、男は嘆息した。

これほどの剛の者に敗れるならばむしろ本望。しかし、心残りは、これほどの剛の者を我旺の元に送り届けられぬこと――。

十兵衛が鯉口を切る小さな鞘鳴りが、男の耳にした末期の音であった。

十兵衛は街道を急ぐ。

空には雲が多く、急かすかの如く、流れていく。

急がねばなるまい。大事になる前に。

「慶寅様、吉報はお届けできぬやもしれませぬ……」

## 弐の八

奥州白河より北東へ数十里。

そこは名も無き村。
冷気あるいは霊気とも形容できそうな底冷えのする乾いた風が吹くと、土煙が舞い、人骨が乾いた音を奏でながら転がる。
そこはあらゆるものが完全に死に絶えた村。
人も、家畜も、犬も、猫も、家も、井戸も、田畑も、全てが死に彩られて、現世(うつしよ)より色褪せていた。
一際強い突風が吹くと枯葉が砂塵とともに舞い上がる。砂塵が消え、視界が開けるとそこに影が姿を現す。影は名を服部半蔵と言う。
服部半蔵はそこで、死に絶えた名も無き村の有様を眺めていた。
奥州検分の任に就き、地図に記された村から村へと渡り歩く。
数えて七十にはなろうか。
広げた奥州の地図に、朱い墨で印が付けられる。
雲行き怪しく、昼にしては暗すぎる。浅間山の灰が上空に流れているのか。
人々は草根をはじめ、犬猫や死人の肉まで食し、なお生にすがれども生者必滅の理(ことわり)より逃れることは叶わず、白骨が数多く散乱する結末である。
しかし、飢饉の被害だけでこれほどまでに村が全滅する――それが七十にも及ぶものであろうか。奥州検分はまだ半分足らずといったところである。果たしてあと如何程(いかほど)の死を抱擁(ほうよう)した村を目の当たりにすれば良いのか、半蔵には想像もつかない。
――人肉を喰らう妖怪の風聞あり。
身の丈は十五尺に及び、その姿は地獄の餓鬼の如し。生死を問わず人肉を喰らいて村から村を渡り歩く。逃げるものには首を飛ばして喰らいつく。何人たりとも逃れられぬ。
妄想じみた風聞ではあるが嘘とも言えぬ。半蔵が奥州を駆け巡り今日に至るまで、そのような妖怪とは遭遇してはいない。幕府に報告し、専属で検分に当たる者が必要かもしれない。
厭(いや)な風が吹いた。
耳朶(じだ)に唸る風の音は絶望と怨嗟の呪言の如し。
誰が偲(しの)ぼうか、死に絶えた村の有様を。
誰が憂うのか、看取られずに消えた命を。
死と影の色に彩られた忍装束からは、半蔵の表情は伺えない。
気配がひとつ、半蔵の側に現れる。伊賀の忍、半蔵の手の者であった。
「半蔵殿、十兵衛殿より書状を預かって参りました」
「……十兵衛殿から？」
書状を受け取り、内容を存分に吟味する。任の最中に十兵衛から書が送られてくるなど大事に違いない。読む前から重要な内容であることは容易に推察できる。
読み終えて半蔵は含み笑いを漏らし、
「――燐」

指先に挟んだ書状を風に乗せる。指先から離れた瞬間、書状は炎に包まれる。その炎は不思議なことに風の中にあっても書状を消し炭と成すまで消えることはなかった。

「十兵衛殿も無茶を申す。既に江戸を離れておきながら、碓氷峠で拙者を待つとは……」

急がねば到底間に合わない。

半蔵は碓氷峠までの道順を思案する。地図などなくとも、地名さえ判れば容易に道や距離は算出できるもの。少なくとも、それができなければ日本全土を庭とせねばならぬこの役目においては話にならない。

街道沿いでは時間がかかりすぎる。道無き道を、ひたすら往かねばなるまい。浅間山が再び噴火しなければ、何とか間に合う算段はある。

半蔵は兵糧丸をひとつ、次に水渇丸をひとつ、口に含む。

風が吹く。

それは疾風。

黒い影は疾風となりて、馬よりもなお迅く、人を拒絶する岩壁を越え、半蔵は碓氷峠へと奔った。

## 弐の九

その刃が煌く。

剣閃は目視できず、そもそもそれが居合術であったことなど、鞘に刀が収まる小気味良い音を聞いたからそうだと理解しただけであって――刻、既に遅し。

涼しげに佇む夢路の悲しげな瞳が、首と身体が別離を告げる刹那の最期の記憶となった。

崩れた身体は首が無いことを除けば、争いの形跡など微塵もない美しいものであった。地に伏した身体は頭に送り出すはずの血をひたすらに土へ送り出す。転がった首は、虚ろな瞳で夢路を見上げる。

夢路の鼻孔を強い鉄の臭いが刺激する。気にすることでもない。首無しの死体みっつに囲まれれば、むしろ当たり前のこと。

首を失ってまで黄泉から戻ることなど有り得ないことだが、夢路は己の凶行の始終を今一度心に刻むべく、その場を動かない。

目の前の粗末な小屋に、彼らが戻ることはない。

今日はこれで五人斬った。

昼下がりに斬った二人はどうやら九州の主持ちのようだった。今し方、斬った三人はこの辺りの有名な流派の門下らしかった。刃を交える経緯はともかく、その力量は求めるものに遠く及ばない。

夢路は刀を抜く。白い刀身が、夕日を受けて血の色に輝く。目を細め、刀を軽く振り払うと鞘に収める。血の一滴も刀身には付着していない。苛烈な修練の上に成り立つ神速か

つ正確無比の太刀筋を以ってすればこそ可能な技。
——我が剣に、迷い無し。
なのに、何故、心に、暗いものが——広がっていくのだろうか。
小さな滝が絶え間なく流れ落ち、水を叩く。その音がなければ、静寂に押し潰されそうで、足早にそこを去る。
血にぬかるんだ土を越え、夢路（ゆめじ）は坂を下る。街道筋から離れ、少し奥まったところにこの辺りで有名な流派——名は詳しく知らないが——の修練場があると耳にし、尋ねてみたのだが残念な結果に終わった。
街道に戻り、日が完全に沈む前に手近な宿場町へと急いだ方がよい。刀身に血糊こそなかったが、夕陽の跳ね具合から、脂の付着は防げなかったことが判った以上、早々に手入れをせねば、万が一の事態に陥るやもしれない。
日輪（ひのわ）から長門（ながと）まで、ひたすら西を目指した。
東には鬼咬衆（おにがみ）の多くが向かったと聞いたので——東、とりわけ江戸を避けた理由はそれだけではないが、西へと向かった。それに見合った収穫があったとは言い難い結果に終わったが、それも無理からぬこと。
——我らの目に適う剛の者はいないものですね。
嘆息し、夢路は坂を下る。雑木林の人ひとりがやっと通れる細い道を下る。
腐葉土になりきれていない落ち葉と枯れ木を踏み付ける、自分の足音と違うそれに、夢路は気付く。腕に覚えのありそうな若々しさを醸す、壮年の男が大きめの徳利を抱えて坂を登り、やがて夢路と対峙する。
男は夢路の間合いに近付くと、足を止め、怪訝そうに眉をひそめる。
「おぬし、血の匂いがするな……。この先は我らの修練場しかない筈だが……」
徳利を脇に置くと、夢路をきつく見据える。
「さて、如何（いか）なる用件で赴いたのか、お聞かせ願おう」
男の手が太刀へと伸び、身を屈めてかまえる。
おそらくは兄弟子か、あるいは、師範代であろう男が、酒の差し入れに——という状況を想像する。夢路が三人を惨殺したと知れば、心中穏やかではいられぬことは明白であり、それを聞き出さんと有無を言わせぬ凄味を効かせている。
その剣気たるや、先の三人とは明らかに一線を画しているが、惜しいかな、交渉の余地は一片もないとその眼が告げている。
短く嘆息し、夢路は自嘲する。
——今日、これで六人。

©SNK PLAYMORE 2004 / ©2004 Yuki Enterprise
©SakuraiTohru 2004